

神學の方法論に關する一考察

久松 眞 一

神學には、何等個體宗教に關係なく、形而上學的、哲學的に、神を論ずるものと、一定の宗教の啓示による神を論ずるものがある。通常、前者は自然神學と稱せられ、後者は積極神學と稱せられて居る。自然神學は且く措き、今は積極神學について考へてみようと思ふ。

神學の目的は、一定の個體宗教を概念的に正しく理解し、その個體宗教の宗教的生活に貢獻しようとするところにあることはいふまでもないことである。個體宗教を正しく理解するために、通常、私たちが根本的絶對的な典據とするものはその個體宗教に特有なる聖典である。けれど、聖典は、その個體宗教成立の根本因素である。祖の宗教的直觀もしくは、啓示に基いてできたものであるからである。それであるから、私たちが一定の個體宗教を正しく理解しようと思ふならば、その聖典を正しく理解すればよいわけである。しかるに、この聖典を正しく理解するといふことはい

かなることであり、又、いかなる方法によつてなされなければならぬであらうか。それについては色々な考へ方があるであらう。もしも、聖典自身が色々な意味に解釋せられるやうなおそれのない場合とか、或は、理解する者の方の立場が一樣であるやうな場合とかならば、聖典の理解は何人にも一樣であつて、その間に異解のある筈はないのであるけれども、聖典自身の方にも色々な異つて解釋されうる可能性があり、又、理解するものゝ方にも立場の差異があるやうな場合には、そこに複雑なる相互關係が生じて、聖典を理解する上には、はなはだしき混雜が生じてくることは當然なことである。この混雜は理解者の異つた立場を歸一し、聖典の意味の異解の可能性をば除き去らなければ、到底免れることのできぬものである。しかしながら、理解者の立場の差異は、理解者の具體的個性の差異にもよるものであるから、理解者の個性を無視しなければ、理解者の立場の差異を歸一することはできず、又、聖典内容の絶對的統一をなさなかつたならば、聖典異解の可能性をも除き去ることはできぬ。しかしながら、これは、差別性から一刻もはなれることのできぬ現實生活の裡に於ては、絶對に不可能なことである。それであるから、同一の聖典を見るについても、理解者の個性的立場の差別性によつて見ることになるのは、やむを得ぬことである。しかも、かやう

な事實が聖典自身の成立する一要素をなすやうな場合もあるのである。私たちの唯一の典據とする聖典の中でもなほ一層よりどころとするものは、その聖典の中心となる者、即ち、その個體宗教の創立者、もしくは、創立者に擬せられたる者の言行であらう。しかるに、その言行そのものは同一であつても、それを直接に見、或は、聞く聖徒たちの個性的立場の差別性によつて、見聞した言行の理解に差異が生じてくるのである。しかうして、聖典中には、各聖徒の各の理解によつて創立者の言行が書かれて居る場合が尠くないのである。創立者に直接に師事し、創立者の言行の理解が比較的一様でありうる筈の聖徒の間に於てさへ、その聖徒、聖徒によつて創立者の言行についての理解が異なるのである。クリスト教に於ても、各々聖徒たちのクリスト觀、即ち、クリストの言行を直接に見聞することによつて得た、各々聖徒の印象には、その聖徒、聖徒の個性的立場によつて差異がある。したがつて、クリストについて、聖徒たちの傳へるところも、その聖徒、聖徒によつて差異あるを免れないのである。佛教に於ても、佛弟子の間に、すでに釋尊觀の差異があつたであらう。直接に敎祖に師事した聖徒たちの間に於てさへ、敎祖觀に差異の生ずることを免がれなかつたのであるから、時代も、境遇も、異なる理解者が、聖典にあらはれて居る敎祖の言行、若しくは、聖徒た

ちの教祖觀を通して教祖を理解しようとする場合には、さまざまな理解をなし、異見を生じてくることはむしろ當然のことといはねばなるまい。かやうに、聖典理解に關する異見の起因が、理解者の個性的立場の差異にある場合も尠からぬのであるが、又、それが聖典自身の内に胚在することも決して尠くないのである。例へば、聖典の内容に矛盾撞着するやうなものがある場合の如きである。かゝることは、言とか、行とかいふ差別の相によつてあらはされて居る聖典としてはやむを得ぬことである。

かくの如く、聖典自身も、理解者も、差別性を免れぬのであるから聖典についての理解がまちまちで統一を困難ならしめるのであるが、苟くも聖典の正しき理解を主張する爲には、聖典自身の差別性も、理解者の差別性も悉く消逸せしめ、それ等のものを一のものより無礙に理解し去らねばなるまい。即ち、差別性を平等性に組織統一せねばなるまい。この要求によつて個體宗教を組織的に理解せんとする神學が起つて來るのである。すでに神學は聖典に絶對の眞理を認め、それを根本的の典據とするものであるが、その聖典内の矛盾撞着らしきところを、矛盾なき統一としていかに理解すべきか、即ち、いかに合理的に説明すべきかといふところに抑もの源を發するものであるから、知的、論理的、要求的に基くものといはねばならぬ。然るにこの矛盾の

ない論理的統一の要求は聖典が理解者に對せぬとき、或は、聖典が文字通りありのまゝに見らるゝときは起らないのであるけれども、聖典が理解者に對し、しかも、聖典と理解者との間に、何かある間隙が存在する場合には必然的に起つてくるのである。もし、聖典と理解者との間に何等の間隙撞着もないならば、統一を要求するといふことは無意義といはねばならぬ。それであるから、論理的統一の要求は聖典と理解者との間の矛盾を前提豫想するものである。しかうして、この矛盾とは、詳しくいへば、理解者の精神内容、或は文化内容と、聖典内容との間の矛盾といふことである。されば、この矛盾の統一とは、聖典からいふと、聖典が理解者の精神内容中に自分自身を表現することである。又、理解者の方からいふと、理解者の精神内容が聖典中に自分自身を表現することである。両者が相融合統一せられて、始めて兩者の矛盾が除き去られるのである。この矛盾が除き去らるゝといふことが組織的統一的理解といふことであるから、組織的理解といふことは、理解者の精神内容と聖典との間に、その何れにも矛盾せざる仲介物を立てるといふことにもなるのである。しかるに、理解者の精神内容には時により、場所によつて色々の差異がある。理解者の精神内容が極めて單純で未開である場合には、理解者が聖典内容と何等の矛盾にも陥らぬであら

うし、又陥つたにしても、極めて簡單に仲介物を作ることができらうであらう。それはそのかはり、仲介物としての職分の能率が低いものである。しかるに、精神内容が複雑に分化發展して居る場合には、色々の點で、聖典内容と矛盾するやうなことが多くあつて、それを統一するといふやうなことは容易ではない。しかし、又それだけ統一せられたる理解の體系は包括的になつて、仲介者としての役目がより完全になるわけである。それであるから神學の價値の高い低いは、神學成立の一因素である理解者の精神内容の高い低いに依ると見ることがもできるであらう。神學の歴史を見て、もその時代の文化内容によつて神學が變遷消長して居る。クリスト教がギリシヤ、ローマに入つてきたときには、神學は當時のギリシヤ、ローマの文化内容を代表して居つた。プラトーン、アリストートルなどの思想と融合し、十五四世紀の神學を見ると、文藝復興の文化内容と調和し、近世になつては、自然科學、或は觀念論的哲學の影響の下に組織せられて居る如きは明らかにそれを示すものである。佛敎の如きも、支那に入つては、支那の文化内容の代表たる儒敎、或は、道敎の如きと融合し、日本に入つては日本の神話、武士道など、統一されて發達して居る。これは佛敎、クリスト教にかゝはらず、何れの宗教に於ても當然なことである。何とならば、神學の成立には理解

者がその缺くべからざる一因素をなして居るのであるから、その理解者の持つて居る文化内容が、その上に大なる影響を持つのは當然なことである。かくの如く、神學の成立は理解者と聖典との間の矛盾を除き去つて、聖典理解の組織的體系を作るといふことにあるのであつて、人生の現實生活と、聖典とを密接ならしめ、その間に橋をかけるものであるから、宗教の發展、流布の上には缺くべからざる契機となるのである。如何に尊き聖典であつても、現實生活に没交渉にすてをかれるならば、その尊さを知らるゝことは出来まい。それであるから、個體宗教が時代より云へばその時代、場所よりいへばその場所、一般に、理解者よりいへば其理解者にとつて適切なる神學を持たぬといふことは、その宗教をして現實生活に交渉なき死物たらしめる所以である。されば神學を完成するといふことは、個體宗教の重要な仕事といはねばならぬ。しかうして、神學の完成は、文化の最高理想を樹立し、その理想内容と、聖典内容との組織的體系を組立てることによつて、始めてなしとげられるのである。何とならば、文化の最高理想とは、現實生活の最高理想であつて、いかなる理解者の文化も之を理想とし、これに包括せられるものであるから、理解者の文化内容との統一によつて成るいかなる神學も、文化の最高理想との統一によつて成る神學の下に排列しら

れねばならぬからである。

神學は、かくの如くして、理解者及び聖典内の矛盾を除去し、そこに完全なる統一體を作つて、それを以て、聖典従つてその宗教の正解とするのであるが、かゝる方法による理解を、果して、その聖典及び宗教の正しき理解といふことができるであらうか。私たちは今、これを明かにするために、まづ神學成立の要素である聖典と、理解者とを分析的に考察してみよう。聖典の中心となるものは、教祖の言行の記録である。教祖を、その宗教の神とするにしても、亦神の啓示とするにしても、何れにしても、教祖の言行とは神の啓示のことであらねばならぬ。即ち、神が言、或は、行といふ差別相に現はれたものである。現はれるとは、私たちの現實生活に於て經驗し得るものになるといふことである。そこで、現はれる神といふ一と、現はれたる神としての差別、即ち、多とが考へられるであらう。私たちの現實生活に於て經驗し得るものは後者であつて前者ではない。それであるから、私たちが、通常、教祖の言行を見聞し、或は、聖典を見る場合には、差別の相のみが見られ、差別の根柢にある一なるものが見られないことになる。したがつて、一の現れとして見られてのみ、意味を保有すべきその差別が、單に差別としてのみ見らるゝことゝなるのである。即ち、その差別が神の姿として

見られずして、通常の差別として見らるゝことゝなるのである。かくの如き差別は、もはやその個體宗教の意味を失つたものであるから、いかなる立場からでも見らるゝことができる。そのやうな差別は任意の立場から統一してみることができ、しかし、かゝる統一の仕方は、統一する者の勝手なる仕方であつて、その個體宗教からの眞の内面的統一でないことは明かなことである。教祖の言行が統一さるゝといふことは、その各々の言行が、その言行の起り來る源に歸るといふことでなければならぬ。こゝにいふ源とは、いふまでもなく、教祖の言行をして特殊な意味あらしむる根源としての神自身でなければならぬ。それであるから、教祖のあらゆる言行を眞に統一するとは、そのあらゆる言行をして、その未だ現はれない以前の神に歸らしめることであらねばならぬ。したがつて、聖典にあらはれたる教祖の言行を眞に正しく理解し得るものは、その意味の根源たる神のみでなければならぬ、神のみが教祖の言行、或は聖典の正しき理解者である。かくて、もしも、私たちが聖典を正しく理解しようとするならば、神自身と一致し、神自身の立場に立たねばならぬ。神自身と一致すれば、聖典の眞の意味が明かになるのみならず、その個體宗教に關する一切の本質的なるものが明瞭になるわけである。なほそれに止まらず、現代人が神と一致すれ

ば、現代の文化内容の上に、又、文化の最高理想を自己の精神内容として持つ人が神と一致すれば文化の最高理想の内容の上に、神は自身を啓示するであらう。こゝに於て、はじめに神學の理想である個體宗教と文化内容との矛盾なき、正しき統一が成立つのである。それであるから、眞正の神學の組織は神の體驗者——神の體驗、といふ語が、個體宗教の一般に適用しがたいならば、個體宗教の體驗者——にまたねばならぬ。神學は、こまでも、個體宗教の本質的意味に基いて組織せられねばならぬ。しかうしてこの本質的意味はその個體宗教の體驗によらなければ、決して知ることのできぬものである。もしも、神學をば、その宗教の體驗によらずして、他の立場、たとへば、哲學とか、倫理學とか、心理學とか、科學とかいふやうな立場から組織しようとするならば、それはまさしく主客の顛倒である。神學は宗教的體驗の立場より世界觀、人世觀を組立てねばならぬ。神學に於ては一切の意味、價值の規範は宗教的體驗そのものでなければならぬ。神學の根本原理となるものはこの規範でなければならぬ。現代の神學者——クリスト教にしても、佛敎にしても——は神學のこの本質的立場を忘れて居るかの如く思はれる。クリスト教にても、中世より近世の初期にかけては、この立場の守らるゝことが多かつたのである。かのテオゾーフエルであるエツ

クハルトやベームなどは最も徹底的にこの立場に立つたものであり、又それを主張したものである。佛教に於ても諸宗派の宗祖といはるゝやうな人の教判は多くこの立場に立つたものである。今日は、 그리스ト教にしても、佛教にしても色々の方面から學問的に盛んに研究さるゝにかゝはらず、私たちの主張する如き眞の神學的研究の輕視されて居ることは、宗教としても、學問としてもはなほだしき遺憾事であらねばならぬ。